

ドイツチュービンゲン大学民俗学研究所の メディア研究 その歴史と特徴

李 相賢

LEE Sang-Heong

翻訳：中村 和代

1 研究対象と目的

チュービンゲン (Tübingen) 大学民俗学研究所 (以下チュービンゲン研究所) が、1996年の夏学期に開催したコロキウム (Kolloquien) ¹のテーマは「チュービンゲン研究所のメディア研究」だった。当時H・バウジンガー (Hermann Bausinger) は、チュービンゲン研究所のメディアに関する研究の背景と歴史について簡略に述べ、ドイツ民俗学、中でも経験文化学 (Empirische Kulturwissenschaft) ²においてのメディア研究について三つの命題を提示した。まず、経験文化学はメディアと関連のある学問である、次に、経験文化学は、地域、階層、性別、日常文化についての既往研究を基にした他の学問分野のメディア研究と差別化が図れる、最後に、民俗学はメディアと関連する新しい分野に挑戦する必要がある、という内容を強調した ³。

バウジンガーは、1956年のドイツ民俗学会で、逸早くメディア研究と位置づけることのできる大衆歌謡についての論文 ⁴を発表していた。しかし、チュービンゲン研究所においては、40年後の1996年になってメディア研究の必要性という原論的主張がなされており、その時間の隔たりは注目に値する。彼がドイツ民俗学会の会長であった1976年には、学会が主管するメディア研究をテーマにした学術大会も開催されている。そこで多様な論議 ⁵が展開されたにもかかわらず、それから20年が過ぎた後に、再び同様の原論的主張が提言された状況には、いくつかの理由が存在するだろう。中でも、特にドイツ民俗学会の研究傾向やメディアの持つ特性が、そのような主張を繰り返さざるをえなかった重要な背景であると推察する。

バウジンガーが、逸早く大衆歌謡についての研究を発表した当時、普通のドイツの人々の日常生活に影響を与えたメディアとは、新聞、ラジオ、音盤程度であった。しかし1990年代半ばには、大半の家庭がテレビやビデオなどを所有しており、またデジタルメディアの総合媒体としてコンピューターが普及していた。時代時代で多様なメディアが登場するので、その影響によって研究対象はもちろん研究方法も、やはり多様にならざるをえなかった。ドイツの民俗学界もまた、1970年以降学問の名称を変更するほど研究対象と方法論がめまぐるしく変化したこともあり、40年余り後までも上記のような議論が継続されたのだと判断できる。

本研究は、ドイツ民俗学におけるメディア研究の歴史と特徴の紹介を目的としている。メディアに関する研究は、新聞や放送を研究するコミュニケーション専門の学問分野、例えば言論学¹^註などで重点的に展開されている。他にも、大衆文化を探究する社会学などで研究が行われているが、民俗学の分野にいたっては「メディア」は稀有な対象といえるほど、活発に研究が行われな

かった。多分それは、民俗学が伝統的なものを研究対象あるいは研究目的としていたことに起因していると考えられる。例えば、従来の民俗学の主要研究対象の一つである口承文学は、メディアの媒介なく直接的に情報を伝達する、口述の「文学」を研究するといったところを重要視しており、既往の民俗学も一般的に特定地域の住民、または民族の暮らし自体を研究するものとして、メディアなどによる暮らしの変化に対しては、否定的に捉えられていた。

しかし古くから、民謡や説話など民俗学の主要な研究対象が、メディアの初期形態である書物、音盤、ラジオなどによって流通されてきたので、産業化時代の民俗に関心を持った民俗学者たちは、逸早くメディアに注目しその研究を進めた。チュービンゲン研究所のメディア研究がその良い例である。

したがって、本研究ではチュービンゲン研究所が1960年代以降、メディアに関心を持つようになった学史的背景、そしてメディア研究のために選定された対象と研究方法の特徴について検討する。そこで、特にこの研究所を1991年まで主導してきたバウジンガーの、新しい民俗学研究の方向性とメディア研究を中心に考察していく。

具体的には、チュービンゲン研究所が1950年代後半に行った、既存民俗学の民謡研究への批判と歌謡についての研究、1970年代のドイツ民俗学の新研究の傾向で、特にフランクフルト（Frankfurt）学派的批判的な社会科学に影響を受けたチュービンゲン研究所のメディア研究と、テレビに関する研究の傾向と特徴を分析する。そして、日常生活とメディアの関連研究での、メディア学の分野とチュービンゲン研究所の研究成果の特徴、またその限界についても調べていく。状況の把握につながるよう、本研究では主に関連する事例を挙げながら論議を展開する。

2 60年代の歌謡と大衆小説の研究: チュービンゲン研究所の新たな研究の傾向

バウジンガーが大衆歌謡に関する論文を発表する頃、彼はチュービンゲン研究所の研究員であった。当時、この研究所にはドイツ文学者（Germanistik）のH・シュナイダー（Hermann Schneider）と、H・ドルカー（Helmut Dölker）が教授として在籍しており、この二人を中心に、民謡、説話などの口承文学や、地域の祝祭である謝肉祭、またヴュルテンベルク（Württemberg）地域の方言などの研究が重点的に行われていた。

バウジンガーは、1952年に故郷の地であるアーレン（Aalen）を中心に、ヴュルテンベルク東北部の各村々の話を収集すると、その分析をまとめ博士学位論文として提出した⁶。この時彼は、既存の口承文学研究とは違う視点で、説話などの昔話ではない、調査地域の住民の現在の話を分析対象として捉え、その類型を分類するとともにその機能について考察した。

そして1955年には、研究所のプロジェクトの一環で、彼は同じ研究所の同僚であるA・ルオフ（Arno Ruoff）とともに、ヴュルテンベルク地域に属す都市と村の方言や話についての調査を行っている。バウジンガーの回顧によると、調査当時、調査対象の伝承の推移を追いながら、メディアがどのような影響を及ぼし、またどのような役割であるのかという点に注目したが、具体的な調査には至らなかったという⁷。

しかし、その後も同時代の人々の話や歌に関心を持ち、調査研究を続けたバウジンガーは、既往の民俗学者が行った民謡や説話の調査とは大きく異なる方法で、過去の民謡や説話と現在歌われている歌や話とを比較研究し「民謡と歌謡」という題で発表した。それが先に触れた論文である。

彼は、調査を繰り返すうち、既存の民謡の概念や規定と調査当時に歌われていた民謡の状況との差に気が付いた。民謡は、一般的に民族と民衆の歌として、特定地域の民族あるいは住民の、音楽的特徴や生活の特徴が込められている。大半の民俗学者もまた、そのように認識していた。しかし1950年代、彼が現地調査を行っていた頃には、既に民謡は、学校あるいは合唱団(Gesangverein)などで歌われるのみだった。また、産業化以前は地域や村ごとに多様な民謡が歌われたであろう状況が、調査当時は全国的に知られた民謡しか接することはできなかった。

周知のとおり、ドイツで「民謡(Volkslied)」という言葉を作り、各地域の民謡を採集し研究したのは、J・ヘルダー(Johann Gottfried von Herder)である。彼は、民謡は特定地域や特定民族の特徴が込められた民族の歌であるため、民族の特性⁸を把握するためには、民謡を研究すべきであると主張した。しかし、彼が採集した民謡には、J・ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)の詩の中の、郷土的な内容も含まれていた。さらに彼は、当時都市の人々の歌を「叫んでいる」と軽蔑するほど、同時代の人々の歌には関心がなく、民謡の範疇にも入れることはなかった。

ヘルダーの民謡への認識と範疇は、後に続くドイツの民謡研究者に影響を与え、そのような研究者たちが採集した民謡が印刷というシステムを通し、後の民謡伝承に再び影響を与えた。一方大衆歌謡は、当時の民俗学者には民族的な色合いのない商業的な目的のために作られた歌という否定的なイメージが強く、研究対象として関心が向けられることはなかった。実際、ドイツで大衆歌謡は既に20世紀初頭から日常で親しまれる歌として定着していたが、1930年代に村の民俗調査を行っていたドイツの民俗学者たちは、農村で大衆歌謡が日常の歌として多く歌われている、という報告に留まっている⁹。

バウジンガーは、民謡に対する理念的なアプローチを批判し、大衆歌謡研究の正当性を提示するため、まず民謡の歌謡化について言及した。民謡が、大衆媒体、レコード盤やラジオを通じて伝播し、それにより一般の人々が歌謡のように容易に口ずさめるようになった現象に注目し、そこから大衆歌謡に対する否定的なイメージを持つ研究者たちを批判した。そして、大衆歌謡は作業現場でも身近に歌われ、特定の世代ごとに様々な大衆歌謡が歌われていることから、農村社会で民謡が担っていた機能を、大衆歌謡が代わって果たしている場合が多いと検知した。彼は、民謡と大衆歌謡の機能的等価性(funktionale Äquivalenz)を強調しながら、民謡研究の代替となりえる、現在のドイツの人々の歌文化を研究する必要性を主張した。この主張に基づいた研究は、彼が1950年代後半に、民俗の現代的機能についての調査を行った後、本格的になされるようになる。

バウジンガーは、H・シュヴェート(Herbert Schwedt)、M・ブラウン(Markurs Braun)とともに、戦後の東欧圏からバーデン＝ヴュルテンベルク(Baden-Württemberg)州に移住した人々を調査し、1959年に『新しい移住 民俗学的—社会学的調査(Neue Siedlung. Volkskundlich-soziologische Untersuchungen)』¹⁰という研究書を出版する。この研究は、チュービンゲン研究所が東欧圏から移住したドイツ人の文化を調査するために、1947年に始めたものであり、本来の目的は移住民の移住前の文化を捉えるところにあった。

しかし、バウジンガーと二人の研究員は、当時の具体的な移住の現状を記述し、移住地域で新たに運営された社会的な集まりや組織の種類と特徴を分析した。また、移住地域で移住民が移住前の文化を活用する様相と特徴も加えて分析した。それまでの民俗学者は、移住前の文化をドイツの過去の文化の名残と見て関心を寄せたが、バウジンガーらは、新たな生活環境の中で、以前の文化と見なされる彼らの伝統文化がいかに活用されるのか、その背景と様相に関心があつた。さらには、移住計画についての移住民たちの反応と問題の解決のため、具体的な対策案の提示も

行い、最後に、移住民たちの故郷に対する認識について考察した。このように、この研究の特徴は、民俗の伝承と変化を移住民の新しい環境との関連性で分析したという点である。特に、副題に見られるように、社会学的な方法を活用したことも斬新であった。

上記以外にも、パウジンガーがメディアに関心を持った背景とその目的を、読み取ることのできる研究では、『科学技術世界の中の民俗文化 (Volkskultur in technischen Welt)』がある¹¹。これは、彼が教授資格を取得するための請求論文として提出したもので、ドイツの人々の現在の生活を研究するにあたって、既存の研究対象をどのように活用すればよいか、その可能性を試みたものだ¹²。

彼は、既存の民俗学研究の大半が対象化した民俗が、技術文明の影響を受けながら変化する過程を、空間、時間そして社会的な関係性の中で分析した。まず、空間に関し分析した内容では、民衆の生活は旅行や放送などによって経験できる空間が広がり、その過程で他の地域の民俗などへの関心も増加すると考えた。このような関心は、紀行文によく表れ、また、他の地域との交流を通して表れる例がある。例えば合唱大会などで特定地域の民謡を違う地域が歌うようになるという様相や、都市に住む人が農村を故郷と重ね農村の民俗に関心を持つ様相を挙げることができる。

次に、時間的な視点からの分析では、急速な変化とともに時間の流れも同様に速度を増して認識され、そこから逃避しようとする多様な行動と装置が出現するのだが、民俗に対する関心の登場や民俗の活用もそこに関連するという見解である。放送局で民謡を流す背景や、民謡が録音され人々がレコードを購入する背景、合唱団に参加し人々が民謡を歌う背景には、産業化時代の時間の認識が密接に関わっていると考察した。

最後に、社会の変化と民俗との関係を分析した内容では、過去民俗が伝承されていた時代は階級社会であったが、昨今の産業化時代は階層社会であり、そのうえ急速にその階層構造に分割が起こっている。階層構造が分割される時代は、他の階層についての関心が起きると見ていた。そこで、19世紀の市民階級が民俗に関心を持つようになる様相や労働者が市民階級の生活様式を真似る様相などを例として挙げている。また、そのような時期には、全ての階層が同一の文化に関心を寄せる現象が起きる。このような現象が生まれる背景には、民族国家形成という理念的、政治的要因があり、その次に公教育の強化を挙げることができる。そして、感傷的なスタイルの増加が、民俗をはじめ過去の農村社会と文化に対し、大半の階層の人々の関心を引く背景となった。それは、民謡の中でも特に叙情的な民謡への関心や、農村の牧歌的な家族生活を描いた小説へ向けられた人気に表れていると考察した。

上記のように、産業化以降、ドイツの人々が営んだ新しい暮らしの中での民俗の役割を分析した後、パウジンガーとテュービンゲン研究所は、メディアについての本格的な研究に取り組んだ。1960年代の初頭は、主に古典的な民俗学の研究対象と関連する民謡と歌謡、そして民族文学 (Volksposie) と通俗文学 (Trivialliteratur) を中心にメディア研究を行った。

最初に発表された通俗文学の研究は、ロマンス小説の内容を分析した『20世紀の平凡な家庭とロマンス小説 (Der triviale Familie und Liebesroman im 20. Jahrhundert)』¹³といえる。以降は、戦争小説の小冊子を読む読者層 (die Leserschaft von Kriegsromanheften) の研究¹⁴、アメリカの西部開拓時代を扱った小説 (Western 以下西部小説) 研究¹⁵などが続いた。

テュービンゲン研究所の行った通俗文学研究は、主にテキスト、即ち内容分析 (Inhaltanalyse)¹⁶、そしてその生産環境と購読者分析で構成されていた。例えば、西部小説研究の場合、四項目に構成されており、まず書かれた小説の歴史の考察、次に登場人物である英雄をはじめ悪党、インディ

アン、軍人など、小説の周辺の人物を掘り下げ、小説に表現されている価値観などの分析、文学的特徴といえる行動構造、時空間などの分析、そして西部小説の生産環境と読者の分析である。

このような分析は、既存の民俗学が行ってきた民族文学の研究方法与多くの箇所では違いが表れている。それまで、ドイツ民俗学が展開してきた説話に代表される民族文学の研究では、類型とジャンル、歴史的な変化の過程、地域的な差などの分析だった。一方、チュービンゲン研究所では、現在のドイツ人が好んでいる通俗小説に注目し、その内容とともに生産環境と読者についてメディア研究の方法を活用し分析している。

次に、歌についての研究では、チュービンゲン研究所の最初に行った民謡と歌謡についての研究といえば、H・フィッシャー (Hermann Fischer) の『民謡、大衆歌謡、人気曲 (Volklied-Schlager-Evergreen)』¹⁷が挙げられる。この研究で、フィッシャーは、歌詞や類型、地域別変移といったそれまでの民謡研究とは違う、学校、同好会 (Verein) またはレストランなどの場で歌われている歌を調査し、その意味と機能を探究した。調査地域は、チュービンゲンに隣接した工業都市のロイトリンゲン (Reutlingen) で、実際歌が歌われている現場の調査に加え、学校教育に活用されている音楽の本、同好会で使われる歌の冊子、そして放送媒体から流れる歌などを調査した。

その後、チュービンゲン研究所では、大衆歌謡だけを集中的に分析する研究が進められた。例えば、W・メツガー (Werner Mezger) は、ドイツの大衆歌謡を文化産業と関連づけ分析している¹⁸。彼は、まず大衆歌謡が生産される媒体であるラジオとテレビ、新聞と広告、大衆スターとファンクラブなど、歌謡の広報手段について分析を行った。そして、1920年から1970年までドイツの大衆歌謡の歴史について検討を行い、大衆歌謡の音楽とテキストに関する内容の分析、大衆歌謡と大衆スターのファンたちの特性を分析した。

上記の内容は、チュービンゲン研究所が1970年代に入り、既存の民俗学の研究対象と関連のあるメディア研究から、次第に大衆文化に関連するメディア研究へ変化する様相を見せる成果である。この時期のチュービンゲン研究所のメディア研究は、主にラジオやテレビなどの放送媒体についての研究を行っていたが、方法論的にはフランクフルト学派の文化産業批判から影響を受けたものだった。

3 70年代の放送媒体研究とフランクフルト学派の文化産業研究

民謡と大衆歌謡についてのメディア研究でわかるように、チュービンゲン研究所の放送媒体についての研究は、民謡など主に民俗音楽と関連するものであった。特に、民俗音楽を放送する局の政策の特徴、その問題点、放送による民俗音楽の変化様相、そしてドイツ人への音楽文化の影響などを分析している。

まず、民俗音楽の放送番組についての研究では、『故郷放送、民俗学、フォークロリズム (Heimatkund - Volkskunde - Folklorismus)』¹⁹を挙げることができる。この本の著者は、民俗音楽を流す放送とその番組が、人々に郷愁をかきたてさせる役割をすると見て、それらを「故郷放送 (Heimatkund)」と命名した。そして、故郷放送の数と位置、放送担当地域、放送時間を調査した。また、放送担当者に、故郷という意味、フォークロア (Folklore)²⁰とフォークロリズム²¹の意味についての質問を行った。

このような調査から、著者は、故郷放送とはフォークロリズムを生産する主要な機関であると指摘し、そこで放送される民謡を対象に民俗音楽の種類の特徴を調べ、その結果を基にして放送

フォークロリズムの特徴を提示した。なお、この研究は、当時ドイツの民俗学者たちが民俗学を専攻する学生たちの就職問題解決に向けた対策の一環として、放送を中心とした媒体の特性を彼らに教示する目的で進められたものでもあった。

著者は、この研究で、視聴者の意見は反映されず、民俗音楽や地域の民俗に疎い担当者が民俗音楽の選定を行っていることに言及し、特に放送局が地域民俗政策本位に民俗音楽を選定する故郷放送の作業を批判した。

このように、放送媒体の作業と民俗音楽の関係での分析において、批判的な見解を提示した背景には、ドイツの民俗学者、中でもテュービンゲン研究所の研究者が、マスメディアを批判的な視点で捉えていたフランクフルト学派の影響を受けていたことが大きい。フランクフルト学派の影響は、メディア研究をはじめ、ファルケンシュタイン (Falkenstein) 学術大会 (以下ファルケンシュタイン大会) での、テュービンゲン研究所の学問的立場の表明に表れている。

周知のとおり、ファルケンシュタイン大会は、1969年に戦後ドイツ民俗学の新たな研究の方向性を論議するため開催された。この大会の主題は、「ドイツの民俗学、概念、研究の問題、学問的傾向 (Volkskunde in Deutschland. Begriffe, Probleme, Tendenzen)」であり、五つのトピックに分け進行された²²。

このトピックの中で、テュービンゲン研究所が、ドイツの他の民俗学研究所とは違う見解を示していたものが、「民俗学の認識論的目的 (Erkenntnisziele der Volkskunde)」というトピックだった。テュービンゲン研究所の研究者は、既存の民俗学研究が主に浪漫的な民族主義に基づいた理念を志向していたため、ドイツの人々の多様な歴史的経験や生活を捉えることができないと批判し、そのような問題点の解決には、労働者、女性など様々な人々の生活や文化についての研究を行うことだと主張した。

もう一つ、テュービンゲン研究所の学問的な立場が明確に表れたトピックは「理論と実践 (Theorie und Praxis)」だった。テュービンゲン研究所の研究者は、理論志向的な研究では、ドイツの人々の多様な暮らしの探究には限界があることを認識していた²³。故に、そうではない方法でドイツの様々な人々の暮らしを研究した結果を、ドイツの社会や政治の問題解決に導く方向へ活かし、提示する必要性を強く主張した。

ファルケンシュタイン大会に参加した学者は、様々な論議を展開したが、民俗学研究の問題認識や方向性の設定は合意に至らなかった。只、大会終了後に「ドイツ民俗学は、対象 (規範、風習、物質) の文化的価値と、主体 (関連集団) の相互関係を分析する学問であり、研究の目的は、社会文化的問題の解決に貢献する方向性と方法の提示にある」²⁴と折り合いをつけた。

先に言及したが、テュービンゲン研究所の立場は、支配イデオロギーを反映した従来の民俗学の対象選定における問題や、女性や労働者といった疎外される者たちへの学問的関心を主張し、批判的社会科学を追求したフランクフルト学派の影響を見せている。フランクフルト学派の影響を確認できる論文では、R・ナル (Roland Narr) の「批判的社会科学としての民俗学 (Volkskunde als Kritische Sozialwissenschaft)」²⁵がある。この論文は、ファルケンシュタイン大会以後、大会でのテュービンゲン研究所が取った立場の主張を強化するため編纂された論文集『民族の暮らしからの別れ (Abschied vom Volksleben)』²⁶に掲載されている。論文では、フランクフルト学派が提唱する批判的社会科学の核心的な研究目的と基本的な研究方法を要約し、ドイツ民俗学が進むべき研究の方向性を提示した。

具体的に言えば、フランクフルト学派の基本的な研究目的とは、資本主義を基にした社会変化の探究である。そのためには、研究者は外部からの視線、特に研究者という立場で対象を見るの

ではなく、調査対象者の立場から社会の特徴、特に階級社会の矛盾を認識することが重要だと強く主張した。また、研究者は調査対象者の問題解決のための対策や、調査対象者が自ら問題を認識し解決策を見出させる方法を提示する必要があることを伝えている。このような方法提示と実践行為が成功社会(gelunge Gesellschaft)へとつながると考えていた。

また、フランクフルト学派の研究者は、現在資本主義の階級社会においての問題が継続している背景には、資本主義での生産構造の問題以外に、教育、そして知識人の無批判的な社会研究と経済研究の問題があると指摘した。

そして、社会を構成している様々な階級が、過去のような歴史と文化を維持しているという「幻想」のせいで、階級の問題を認識できない場合がある。故に、そのような民俗学者の研究自体、結果的に階級社会を継続させる要因となるのだと指摘した。ドイツの民俗学者、特にチュービンゲン研究所の研究者は、このような指摘を受け入れ、既存の民俗学研究を批判し、新たな研究対象の選定と方法を模索した。

チュービンゲン研究所のメディア研究には、フランクフルト学派の文化産業(Kulturindustrie)批判の影響が大きい。フランクフルト学派の研究者は、文化産業が階級社会の矛盾をわからなくさせることに寄与していると批判した。要するに、産業化の時代には、人間関係が商品生産と消費関係で認識される、いわゆる事物化現象(Warencharakter)に支配され、文化産業はこのような事物化の意識を助長する機能だと批判した。事物化された世界で、大衆は文化産業が提供する幻想に逃避し、安住するようになり、故に階級矛盾のような問題を認識できなくなると考えた。チュービンゲン研究所では、フランクフルト学派のこの文化産業批判を、放送媒体が提供する民俗音楽番組を分析する際に活用している。

チュービンゲン研究所のE・フラーム(Eckart Frahm)が、1960年代以降のラジオとテレビに放送された民謡など民俗音楽の特徴を考察した研究がある。彼は、放送媒体に登場する民俗音楽の重要な特徴を記述しながら、フランクフルト学派の資本主義社会の大衆音楽に対する批判的見解を受容し分析した。そこで彼は、放送媒体が扱う民俗音楽の特性を三つにまとめ提示した。

一つは、民俗音楽は基本的に慣れたリズムで構成されているので、視聴者にも馴染みや早く心理的安定感を与えることができる。そして、放送媒体は放送の特性上、ドイツの全域あるいは放送提供地域の住民が慣れ親しんだ民俗音楽を流すのが一般的だ。よって、民俗音楽はこのような心理的機能を他の大衆音楽より容易に活かすことができ、大衆音楽の事物化機能においても大衆歌謡より上手に活用されている。

二つ目として、民俗音楽は大衆歌謡のように社会の変化をよく反映している。特に放送媒体の放送人気順位を分析すると、社会や政治の危機的状況には民俗音楽への関心が増えている。当然、放送の頻度が高くなれば、一般的に民俗音楽の音盤の販売数も伸び、結果的に大衆性を確保する。

三つ目は、民俗音楽は平易な題名で、内容が単純であり、慣れ親しんだリズムが反復されるので、大衆性を容易に得ることができる。その上、産業化時代に忘れ去られていく故郷や浪漫的な愛などが曲のテーマであるため、大衆の関心は持続される。このような理由から、民俗音楽は大衆音楽の中で最も利益の残るジャンルの一つなのだと見ることができる。

だからこそ、このような特性を持って放送された民俗音楽は、フランクフルト学派が提起した文化産業の特徴と問題点をどのジャンルよりも詳細に捉えることのできる対象だと、チュービンゲン研究所の研究者は強く主張したのである。

もちろん、チュービンゲン研究所のメディア研究が受けた影響は、フランクフルト学派の文化産業論と批判的社会科学からだけではない。当時、放送媒体が、歌の文化や話の文化に及ぼす影

響関係を実証的に分析した研究も行われていたが、このような研究の傾向は、1970年代の中盤以降にテュービンゲン研究所内で、フランクフルト学派の研究方法への批判が登場したことによるものである。

4 80年代の新しいメディア研究と日常生活研究

大衆媒体を文化産業の一環と見なし、批判的な研究を続けてきたフランクフルト学派とは異なり、ある一部の民俗学者は、放送媒体が人々の歌や話の文化に及ぼす影響関係について研究を行った。E・クルッセン(Ernst Klussen)は、歌を教えるスタイルで提供されている放送番組、いわゆる「歌番組」を調査し、人々に与える影響関係を分析している²⁷。彼は、ドイツの人々が個々の人を通じてではなく、音楽の本や音盤、放送媒体を通じてより多くの歌を習得するという既往の調査結果²⁸を基に、歌番組とそこに参加するスタジオ観覧者や視聴者に注目した²⁹。

彼は、まず歌番組を中継する放送局と放送番組の運営について調査を行った。具体的には、放送時間、回数、番組公開の有無、放送用歌本活用の有無(出版及び配送)などである。合わせて、番組に視聴者も参加し特定の歌を教える「Offen Singen(開かれた歌番組)」の調査も行った。調査内容は、その番組に参加する人々の特性(世代、階層、居住地域など)や参加の動機などであり、歌番組の視聴者も対象とした。彼らの特徴、視聴の背景、そして歌番組が日常的な歌へ及ぼす影響などを、書面調査、インタビュー、参与観察などの方法で調査を重ねた。そして調査の結果を基に、放送局の運営と番組の「担当者・受信者分析モデル(Sender-Empfänger-Modell)」を提示した。

その後、放送という媒体を中心に聴衆や受信者への影響分析を行っていたメディア研究から、次第にメディアと放送受信者の日常生活での影響関係を分析する方向へと転換し展開されていった。このようなメディア研究の方向性の変化が、1970～80年代日常生活へと向かったドイツ民俗学の関心に大きな影響を与えていた。

一方、フランクフルト学派の文化産業研究を基にした大衆媒体の批判的研究が進められた当時、一部のテュービンゲン研究所の研究者は、女性や労働者を対象とした新たな視点での研究のために、農村の調査に再び取り組みはじめた。主に農村の日常生活、特に村を構成している多様な階層と集団の日常生活に焦点を当てていた。

テュービンゲン研究所が、日常生活研究のフィールドに農村を選択したのは、既存の民俗学が農村を民俗伝承の現場としてのみ対象化した研究方法への批判を示すことが目的であったからである。また、現在の社会生活を中心に日常生活の研究を行っていた社会学とは異なる方法で、研究対象者が日常生活を営む様相から、歴史的経験に重点を置いた民俗学的研究の特性と方法を提示するためでもあった。

その後、ドイツ民俗学の日常生活研究は、農村に限定されることなく様々な集団の日常生活研究へと広がった。メディアと日常生活についての研究は、このような関心の対象と方法論の変化過程で登場した。

パウジンガーは、朝に新聞が配達されなかった時の購読者の反応や、テレビチャンネルの主導権争いなどの姿から、現在の日常生活でメディアは不可欠な存在だとして、日常生活の研究にメディア研究の必要性を説いている。このような彼の主張は、すでに『科学技術世界の中の民俗文化』でも力説されていたが、以後もそれを具体化した論文の成果が注目される³⁰。

バウジンガーは、論文で仮想の家族(マイヤー (Meier)氏とその家族)の週末生活とメディア活用 の関係を具体的に記述し、それを基に研究の方向性と方法を提示した。例えば、マイヤー氏が土曜日の午前中大型マートで物を買ひ、帰り道で車を洗車するなど、日常的な姿とともに、マイヤー氏が家に帰り新聞を読みながらニュースについて夫人と会話する姿、子供たちがラジオの騒音問題で争う姿、土曜日の夕方、スポーツ番組の中で最も人気のある「スポーツスタジオ (Sport Studio)」の視聴と、過去出演したスポーツ選手を巡る夫人との些細な口論を記述した。また、日曜日にドイツで最大の販売部数を誇る新聞「ビルト・アム・ゾントーク (Bild am Sonntag)」の購入とその記事の内容で、マイヤー氏と違うサッカーチーム応援を応援している息子との些細な口論を刻銘に記述した。

バウジンガーは、この詳細な記述の体系的な研究のためには、メディアと利用者の多様性を考慮する必要があると説いている。加えて言えば、新聞、テレビ、ラジオなど、メディアの形態は多様であり、媒体の特性によってそれぞれが日常生活で様々な機能を果たしている。同様に、人々もまた日常生活で様々な方法をもってメディアを活用するという特性を認識する必要がある。合わせて、メディアは日常生活で個人それぞれ欲求と関心を充足させ、その方法もメディアごとに多様であるという点も十分に認識し、メディアと日常生活の関係を研究するよう主張した。

この主張に、メディア専門の研究者も、自身の既存の研究を基に、ドイツ民俗学の日常生活とメディア研究との共同研究の可能性を見出させる方向性と方法を提示した³¹。その内容によると、既存のメディア研究の歴史は、大半がメディアの生産に関するものであり、メディアとそれを消費する人々との関係については、ほとんど関心を示さなかった。しかし、バウジンガーをはじめとする、ドイツの一部の民俗学者は、メディアと受容者の、特に日常生活という領域での関係に注目しており、メディア研究と民俗学研究の共同研究の可能性は十分に存在する。ただ、この共同研究で理論的な土台を築くためには、まずメディア研究者が日常生活におけるメディアの役割を、民俗学の主要な対象である家族という範囲として限定し、その研究の方向性と方法を提示する必要があるだろう、と説いている。

このような認識で、メディアの研究者は共同研究の具体的な方向性を示すため、メディアと利用する人々の社会化との関連性を強調した。元来、家族と親族が個人の社会化を担い、その過程を通して特定規範などの伝達に至る仕組みに関しては、民俗学で最も多く研究されたものである。ところが、現在はメディア時代であり、メディアが個人の社会化に一定の役割を担っている。したがって、民俗学の視点でメディアの社会化過程を考察すれば、現在の家族と親族の特徴、そして家族の日常生活を体系的に研究できると考えられた。

また、日常生活は様々な個人個人の相互コミュニケーションの場であるが、同時に個人の過去の経験、現在の生活についての理解、そして未来についての認識がよく見通せる場でもある。よってメディアと関連する行動、特定の時間と空間が活用されるメディアの種類、メディアの特定プログラム(テレビ番組、ラジオのジャンル)の選択、または活用など日常的な行動の中で、個人個人の日常生活の特徴を捉えることができる。

メディアと関連する行動を、日常生活との関わりの中で見出すためには、メディアの類型と個々のメディアが提供するプログラムの知識について調査する必要がある。このような知識を持つことで、個人の社会化の過程を確かめることができる。また、日常生活でメディアを活用する背景と目的の理解には、メディアを使用する個人個人の日常生活についての認識が内在されている。そこへこれらの知識の調査を、家族の成立と営みという具体的な対象と関連付けて分析すれば、日常生活とメディアの関係を体系的に研究できると主張した。

結論として、日常生活で個人個人が特定のメディアを選定する理由と、その活用の背景や目的などを通じ、メディアの影響はもちろん、家族あるいは特定集団を構成している他の構成員との関係、そして日常生活についての個々人の認識を研究できるものとして考えた。これによって、メディア専門の研究者は、メディアの歴史、あるいは類型についての既存の研究の限界を超えることができ、メディア使用者に注目した研究を行うことができる。そしてメディアと日常生活について関心のある民俗学者は、二つの対象を体系的に研究でき、尚且つ、デジタルメディア時代を生きるドイツの人々の日常生活をも研究できると主張した。

このようなメディア専門研究者の提案にもかかわらず、テュービンゲン研究所やドイツの民俗学界において、この提案の本格的な論議や活用には至らなかった。只、テレビドラマの研究、特に視聴率61%を記録した人気ドラマ「シュヴァルツヴァルトクリニック (Schwarzwaldklinik)」についての研究で、この提案が部分的に活用されたことはある³²。また、この時期テュービンゲン研究所は、青少年文化の特徴がよく表れたミュージックビデオについての研究を発表し³³注目もされた。しかし、1998年にメディアと日常生活をテーマにした学術大会は、二つの関係を集中的に研究してきたテュービンゲン研究所ではなく、スイスのチューリッヒ (Zürich) 大学民俗学研究所で開催された³⁴。

日常生活とメディア研究をテュービンゲン研究所が継続して行わなかった理由として、まずデジタルメディアの急速な変化を挙げることができる。コンピューターやスマートフォンといったデジタル機器の発展が急速に進み、このようなニューメディア機器が日常生活に行き渡っている役割を具体的に研究するには、民俗学者としての限界がある。他に、研究所の内的要因として、1990年から歴史的な研究に関心が高まりながら、メディア分野にも近代ドイツの暮らしとメディアの役割といった歴史的研究の方へ向かった。このような研究所の内外的要因によって、日常生活とメディアについての研究は90年代以降活発に進められることはなかった。

5 結び

本研究では、ドイツ民俗学、特にテュービンゲン研究所が主体となり行ったメディア研究の傾向と特徴について分析を行った。そのため、テュービンゲン研究所のメディア研究が展開された過程を年代別に区分し、各年代に見られる研究の特徴に注目した。

1960年代の研究の特徴については、テュービンゲン研究所の大衆歌謡と大衆小説に関する研究の背景と方法の分析を行うとともに、それらの研究の発端となった1950年代のテュービンゲン研究所の、特にパウジンガーが主導した新たな研究傾向について記述した。1970年代の研究の特徴については、民俗音楽に関連した放送媒体についての研究傾向を提示し、合わせて、放送媒体に対する批判的な研究についても言及した。テュービンゲン研究所の放送媒体に対する批判的研究の特徴を提示するため、その研究に多くの影響を与えたフランクフルト学派の文化産業研究の特徴を記述した。

そして最後に、1980年代の研究の特徴として、ドイツの人々の日常生活とその中に存在する多様なメディアとの影響関係を捉えた、テュービンゲン研究所の研究の方向性と方法について論議するとともに、1990年代にはその研究の流れを持続できなかった背景について言及した。

本研究は、テュービンゲン研究所のメディア研究の傾向と特徴について記述し分析を進めたが、研究を展開した時期が40年以上という広範囲にわたり、研究の対象も大衆音楽、大衆媒体と多様

であるため、研究者の論旨が不明確であったと判断できる。また、本学術大会のテーマである、メディアと日常生活についての論議も、簡略な言及のみに終わってしまった。

このような限界は存在したが、本研究で述べた、チュービンゲン研究所のメディアに関する様々な研究傾向と方法の紹介は、日中韓の民俗学者が進めるメディアと日常生活についての研究の一助となると考えている。

注

- 1 テュービンゲン大学民俗学研究所では、毎学期特定のテーマでコロキウムを開催する。このコロキウムには研究所の教授と学生が皆参加し、マスター (Magister) 学位の取得にはこの学術行事への一回以上の出席と発表が必要である。
- 2 ドイツの大学に属する民俗学研究所の名称は、1970年代の初頭に頻繁に変更された。それは、後述する1969年のドイツ民俗学特別学術大会以後の新たな研究方向と関連する。チュービンゲン大学の場合民俗学研究所から経験文化学研究所と変更した。
- 3 Hermann Bausinger, 'Medienforschung am Ludwig-Uhland-Institut. Ein Rückblick', Tübinger Vereinigung für Volkskunde e.V.(Hrsg.), Tübinger Korrespondenzblatt Nr. 46, 1996, pp. 6-11.
- 4 Hermann Bausinger, 'Volkslied und Schlager', Jahrbuch des Österreichischen Volksliedwerkes V, Wien, 1956, pp.37-43.
- 5 学術大会の発表論文は、Hermann Bausinger und Elfriede Moser-Rath(Hrsg.), Direkte Kommunikation und Masskommunikation. Referate und Diskussionsprotokolle des 20. Deutschen Volkskunde-Kongresses in Weingarten, Tübingen, 1976年に出版された。
- 6 Hermann Bausinger, 'Lebendiges Erzählen. Studien über das Leben volkstümlichen Erzählgutes auf Grund von Untersuchungen im nordöstlichen Württemberg' Diss. Tübingen, 1952.
- 7 Hermann Bausinger 他, Ein Aufklärer des Alltags. Der Kulturwissenschaftler Hermann Bausinger im Gespräch mit Wolfgang Kaschuba, Gudrun M. König, Dieter Langewiesche, Bernhard Tschofen, Köln, 2006, p.9.
- 8 後に、民俗学者と文化人類学者は、これを文化という用語で概念規定した。
- 9 Julius Schwietering, 'Das Volkslied als Gemeinschaftslied', Euphorion 30Bd., 1929, p.237.
- 10 Hermann Bausinger 他, Neue Siedlung. Volksk-
- undlich-soziologische Untersuchungen, Tübingen, 1959.
- 11 Hermann Bausinger, Volkskultur in technischen Welt, Frankfurt/Main, 1986.
- 12 この本は、中国語と日本語に翻訳されており、本発表ではメディアと関連する内容を中心に、本の特徴を要約して述べることにする。
- 13 Dorothee Bayer, Der triviale Familie und Liebesroman im 20. Jahrhundert, Tübingen, 1963 (Volksleben Bd. 1).
- 14 Klaus F. Geiger, Kriegsromanhafte in BRD. Inhalt und Funktionen, Tübingen, 1974.
- 15 Jean-Ulrich Davids, Das Wildwest-Romanheft in der Bundesrepublik. Ursprünge und Strukturen. 2.erw. Auflage, Tübingen, 1975.
- 16 ドイツ民俗学の内容分析では、Klaus Geiger, 'Schwerigkeiten mit "Inhaltsanalyse" im Rahmen der Ideologie', Zeitschrift für Volkskunde 68, 1972, pp.236-241.を参照のこと。この論文は、軍人の歌 (Soldatenlied)の分析を批判する目的で作成されたが、民俗学的内容分析の方法と目的の理解に参考となるものである。
- 17 Hermann Fischer, Volkslied- Schlager-Evergreen. Das lebendige Singen aufgrund von Untersuchungen im Kreis Reutlingen. Tübingen, 1965(Volksleben Bd.7).
- 18 Werner Mezger, Schlager. Versuch einer Gesamtdarstellung unter besonderer Berücksichtigung des Musikmarktes der Bundesrepublik Deutschland. Tübingen, 1975.
- 19 Heinz Schilling, 'Heimatkund - Volkskunde - Folklorismus', Hermann Bausinger und Elfriede Moser-Rath(Hrsg.), 前の文献, pp.127-134.
- 20 ドイツ語でFolkloreとは、一般的に民俗音楽などの民俗芸術、特に外国の民俗芸術や再現された民俗儀礼などを意味する。
- 21 フォークロリズムス(Folklorismus)は、「創られた民

- 俗」と翻訳できるが、韓国と日本では「フォークロリズム」と呼ばれている。この用語は、歴史民俗学を探究していたH・モーザー (Hans Moser)が、観光などの産業的目的や政治的目的で、伝承が途絶えた民俗の再現や現存する民俗を変化させることに対し、民俗が内在されている真正性を喪失するという批判を提起しながら、学術的な用語として使用された。一方、パウジンガーは、民俗の持続には変化が伴うものなので、新しく創られた民俗を真正性という尺度で評価してはならないと、フォークロリズムが登場した背景と過程を研究することの必要性を提言した。この内容については、Hermann Bausiger, 'Zur Kritik der Folklorismuskritik', *Populus Revisus*, Tübingen, 1966, pp.61-75.
- 22 この学術大会で発表された論文は、Wolfgang Brückner(Hrsg. und Bearb.), *Falkensteiner Protokolle*, Frankfurt/Main, 1971.に掲載されている。
- 23 パウジンガーは、民俗学の研究対象が、例えば口承文学一つとっても、言語生活、宗教生活、物質生活など様々な領域にわたっているもので、特定した理論だけでは体系的に研究するのは難しいと主張した。Hermann Bausiger, 'Zur Theoriefeindlichkeit in der Volkskunde', *Ethnologia Europaea*, 1968-1969/Volume II-III, pp.55-58.
- 24 Wolfgang Brückner, 'Falkenstein Resolution', 前の文献, p.303.
- 25 前の文献, pp.37-73.
- 26 Herrmann Bausinger 他(Hrsg.), *Abschied vom Volkleben*, Tübingen, 1970.
- 27 Ernst Klusen, 'Einflüsse von Funk und Fernsehen auf lebendiges Singen', Hermann Bausiger/Elfriede Moer-Rath(Hrsg.), 前の文献, pp.97-103.
- 28 Ernst Klusen, *Zur Situation des Singes in der Bundesrepublik Deutschland*. Köln, 1974 und 1975.
- 29 これらの調査と研究は、ケルン(Köln)大学の音楽民俗学研究所(Institut für Musikalische Volkskunde)で多く行われた。
- 30 パウジンガーが行った日常生活とメディアについての研究成果として、Hermann Bausinger, 'Alltag, Technik, Medien', Harry Pross und Claus-Dieter Rath(Hrsg.), *Rituale der Masskommunikation. Gänge durch den Medien Alltag*, Berlin, 1983, pp.24-36. Herrmann Bausinger, 'Alltägliche Herausforderungen und mediale Alltagsträume. Hermann-Josef Schmitz und Hella Tompert(Hrsg.), *Alltagskultur in Fernsehserien*, Stuttgart, 1987, pp.9-28. Hermann Bausinger, 'Ist der Ruf erst ruiniert... Zur Karriere der Unterhaltung', Louis Bosshart und Wolfgang Hoffmann-Reim(Hrsg.), *Medienlust und Mediennutz., Unterhaltung als öffentliche Kommunikation.*, München 1994, pp.15-27などがある。本発表では、この中でも 'Alltag, Technik, Medien' 論文を中心に彼の論を考察する。
- 31 Klaus Jensen/Jan-Uwe Rogge, 'Überlegungen zu einer Theorie des alltäglichen Umgang mit Massenmedien in Familien', Utz Jeggle 他(Hrsg.), *Tübinger Beiträge zur Volkskultur*, Tübingen, 1986, pp.301-320. この論文が掲載された本は、パウジンガーの生誕六十周年を記念して出版された論集である。二人のメディア専門研究者が発表したこの論文は、テレビの幼児番組を研究したもので、ドイツ民俗学者のテレビ研究に多くの影響をもたらした、それが縁で記念論集に掲載されることとなった。
- 32 Michael Prosser, 'Das Phänomen "Schwarzklinik"', Landesstelle für Volkskunde Freiburg badisches Landesmuseum Karlsruhe und der Landesstelle für Volkskunde Stuttgart Württemberisches Landesmuseum Stuttgart(Hrsg.), *Beiträge zur Volkskunde in Baden-Württemberg. Band 5*, Stuttgart, 1993, pp.97-143. テュービンゲン研究所では、テレビの連続ドラマについてのセミナーとプロジェクトが開催されたが、研究書や論文の形で出版されることはなかった。
- 33 Ute Bechdorf, 'Watching Madonna. Ammerkungen zu einer feministischen Medien/Geschlechterforschung. Jermann J. Kaiser(Hrsg.), *Geschlechtsspezifische Aspekte des Musiklernens*. Essen, 1996, pp.23-44.
- 34 この学術大会は、1998年11月6日から7日にかけて、二日間開催された。当時、民俗学、メディア学、歴史学など様々な学問分野の専攻者が参加し、テレビ番組、広告、ドキュメンタリー映画、ラジオ、音盤などをテーマに発表が行われた。

訳注

訳注1：言論学とは、日本式の、新聞学(ジャーナリズム論)から、米国式のメディア・コミュニケーション論を導入して発展した、ディシプリンの変化を伴う呼び名の変更である(参考：李相吉「韓国言論額教育の現況と課題」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』60号、2010年、最終アクセス日2016年8月30日：<http://www.mediacom.keio.ac.jp/publication/pdf2010/lee.pdf>)。

参考文献

- Bausinger, Hermann, 'Volkslied und Schlager', Jahrbuch des Österreichischen Volksliedwerkes V, Wien, 1956.
- _____, Volkskultur in technischen Welt, Frankfurt/Main, 1986.
- _____, 'Medienforschung am Ludwig-Uhland-Institut. Ein Rückblick', Tübinger Vereinigung für Volkskunde e.V.(Hrsg.), Tübinger Korrespondenzblatt Nr. 46, 1996.
- Bayer, Dorothee, Der triviale Familie und Liebesroman im 20. Jahrhundert, Tübingen(Volksleben Bd. 1), 1963.
- Brückner, Wolfgang(Hrsg. und Bearb.), Falkensteiner Protokolle, Frankfurt/Main, 1971.
- Davids, Jean-Ulrich, Das Wildwest-Romanheft in der Bundesrepublik. Ursprünge und Strukturen. 2.erw. Auflage, Tübingen, 1975.
- Klaus Geiger, 'Schwierigkeiten mit "Inhaltsanalyse" im Rahmen der Ideologie', Zeitschrift für Volkskunde 68, 1972.
- Fischer, Hermann, Volkslied-Schlager-Evergreen. Das lebendige Singen aufgrund von Untersuchungen im Kreis Reutlingen (Volksleben Bd.7), Tübingen, 1965.
- Geiger, Klaus F., Kriegerromanhafte in BRD. Inhalt und Funktionen, Tübingen, 1974.
- Jensen, Klaus/Rogge, Jan-Uwe, 'Überlegungen zu einer Theorie des alltäglichen Umgang mit Massenmedien in Familien', Jeggle, Utz 他(Hrsg.), Tübinger Beiträge zur Volkskultur, Tübingen, 1986.
- Klusen, Ernst, Zur Situation des Singes in der Bundesrepublik Deutschland, Köln, 1974 und 1975.
- Mezger, Werner, Schlager. Versuch einer Gesamtdarstellung unter besonderer Berücksichtigung des Musikmarktes der Bundesrepublik Deutschland, Tübingen, 1975.
- Moser-Rath, Elfriede und Bausinger, Hermann(Hrsg.), Direkte Kommunikation und Masskommunikation. Referate und Diskussionsprotokolle des 20. Deutschen Volkskunde-Kongresses in Weingarten, Tübingen, 1976.
- Schwietering, Julius, 'Das Volkslied als Gemeinschaftslied', Euphorion 30Bd. 1929.